

県立高校入試改善検討委員会（第6回）記録

平成23年11月8日（火）

14:00～15:30

岩手県産業会館 大ホール

1 開会（高橋高校教育課長）

2 県教育委員会あいさつ（佐々木教育次長兼学校教育室長）

昨年6月に第1回を開催した入試改善検討委員会も本日が第6回を迎えた。途中、東日本大震災津波の影響で、開催のめどが立たない時期もあったが、ご尽力いただき感謝申し上げます。本日協議いただく提言案は、多様化する生徒の現状や高校入試を取り巻く社会の現状、今後予想される社会の変化に対応するため、現行の入試制度の基本理念は尊重しながらも、よりよい方向に改善するという視点から、これまで協議された内容をまとめたものである。今回はこの提言書の最終チェックとなるが、委員の皆様には最後まで忌憚のないご意見をお願いしたい。

3 県立高校入試改善検討委員会委員長あいさつ（望月委員長）

今日が最終回であり、具体的な詰めになると思う。よろしくをお願いしたい。

4 説明・協議

〔望月委員長〕

本日の協議内容は、「平成27年度以降の県立高校入試の改善について（提言案）」の最終検討である。本日の資料は前回の意見を反映させた提言案でパブリックコメントを実施し、終了後、更なる修正を加えたものである。本日、本日の審議を経て、手直ししたものが確定版となる予定である。

〔里館指導主事〕（資料説明・資料のとおり）

〔横田委員〕

パブリックコメントがなかったとのことだが、そのことをどのように捉えているのか。

〔高橋高校教育課長〕

多くの意見をいただけるよう、岩手県の広報や新聞紙上への掲載、パブコメの期間延長等、周知に努めた。コメントがなかった理由に関しては分かりかねている。

〔横田委員〕

提言案の中の「何よりも受検生にとって適切な入試制度になるよう」という項目が素晴らしい。この改善案は27年度、現在の小学校6年生が該当する。大震災により、これまで考えられなかったような家庭環境、家族環境に置かれた子どもたちが、4年後高校入学の時期に、様々な面から評価をいただけることは、よし自分はこれで生きていくんだ、高田の町づくりをしていくんだという意欲につながるものと感じている。高田の子どもたちの教育、生き方教育を進めるにあたり、たいへん心強いと思った。大賛成ということで意見を述べさせていただく。パブリックコメントがなかったのは、あまりにも内容がよかったからではないか。

〔望月委員長〕

パブリックコメントについては事務局から説明のあったとおりで理解をいただきたい。

〔鳩岡委員〕

(2)の箱の中で、実施を検討するとあるが、少し曖昧なところがあるのではないか。ひとつは、学力調査の実施はいつ頃するのか。これは高等学校側の問題だということは分かる。高校入学までの期間を有意義に過ごさせたい、つまり勉強させたいということだろうが、イニシアチブを高等学校側が取るのか、中学校側が取るのかということが、読む人によって異なるのではないか。今の高等学校側の状況はよく分からないが、私が現職の頃の状況は、学校によっては、推薦入試で合格した中学生に勉強してから入学するように問題集を渡していた。高等学校はこうした指導をする。私はこれは中学校側に対して高等学校側の姿勢としては、はなはだ僭越なのではないかなと思っていた。3月31日まではあくまでも中学校籍であり、中学生をどう指導するかは中学校側の問題であり、高等学校側からの指導はおこがましいのではないかと思う。高校入学までの期間を有意義に過ごさせるために、高等学校側がイニシアチブを取るべきなのか中学校側が取るべきなのか、少しにおわせておいてもいいのではないか。県教委として、何かご指導いただいたほうが良いのではないかと感じている。

〔佐々木教育次長兼学校教育室長〕

推薦入試の合格者に対して、学力検査問題を活用した学力調査を実施したほうが良いのではないかというご意見がある。聞こえてくるところでは、中学校で高校入試に向けてほとんどの生徒が一生懸命勉強している中で、推薦合格者は気が緩むところがあるようだ。中学校では、気持ちを同じにして全員が入試に向けて勉強することで学力が身につくところもある。3年生全員がゴール目指して勉強するという雰囲気を作れるのではないかというご意見をいただいた。事務局としては、合格者についても、学力調査という形で実施する方向で検討させていただく。ただ、実施する場合に様々な懸念もある。態勢が組めるのか、推薦合格者と一般受検者を同じ場所で受けさせるのか分けるのか、今後、細部の詰めが必要であり、最終的な判断は、それをきちんとやってからとしたい。委員の意見は、合格者に対する学力調査は実施したほうが良いというものであり、最大限それは尊重しながら検討を進めたい。今後とも推薦入試の合格者が学力調査を受けるとなれば、中学校も3月の初旬まで中学校が主体的に主導権を持って生徒を教育するという学習環境も保たれるのではないかと思う。合格発表後、入学まで各学校で準備の課題を出すことはあると思うが、3月の合格発表のところまでは中学校の先生方が主体的に生徒を教える環境が整うのでは考えている。

〔川崎委員〕

二重枠で囲まれている部分の意義づけについて確認したい。また、先ほどの推薦入試合格者に対する学力調査の部分とも係わるが、(1)の二重枠の中の最後の部分、「応募資格について、学校裁量の拡大を図る必要がある」という、この文章の前の方を見ると、応募資格の拡大を図るのは、専門高校に限定されるものなのか、あるいは、専門高校以外の県立学校でも裁量を図れるということなのか。

〔及川委員〕

先ほど、学力調査の実施を検討するとのことだったが、確かにこれは絶対に必要なことだと思う。ぜひ実施の方向で進めていただきたい。ただ、やはり検討するという文言が、これだと弱いと感じる。先ほど問題になったように、どこが主体になってその検討をして、どこがどんな形でイニシアチブをとって実施していくのか、そのあたりの道筋をつけておかないと心配である。県教委でやるというのであればそれでよいが、何かはっきりしたものが必要だと思う。

〔玉川委員〕

推薦入試合格者に対する学力調査の実施は、趣旨としては、推薦合格者は合格から高校入学まで1ヶ月以上ある。やはりその間のモチベーションを保っていくのは中学校教育の

在り方からしても必要である。現に、合格者に対し、今の制度下でも高校合格がゴールではなく、新たなスタートであるにとらえ、様々な課題を与えている。高校から学習課題を頂戴し、それを利用することもある。基本的には、年度末までモチベーションを維持していくことが本筋で、実際にそれを行っている。しかし、実際に調査の実施となった場合に、ちょっと懸念されることは、実施してその結果等をどのように利用していくかということである。どのように捉えてデータとして使われていくか、懸念という言葉は適切ではないが、中学校としては気になる部分である。やはり、推薦で合格した生徒の学力や点数が、次年度以降こうしたデータをもとに推薦合格の判断材料になっていくことも考えられる。この取扱い等も含めて検討いただきたいことを、中学校側としてお願いしたい。

[高橋高校教育課長]

枠で囲まれた部分は、全体的に高校として反映させていく内容だと捉えていただいてよい。それから、みなさんご指摘のように、学力調査は実施する方向で検討したい。表現は事務局で検討させていただきたい。それから(1)については、農業後継者や工業技術者等あるが、これは専門高校だけとは考えていない。これは、今も実施されているが、周知徹底されていない部分あり、あえて中学校にこういう形でも推薦入試は行われていることを明示したいとの意味があったもので、決して、専門高校ということではない。それから、推薦入学者の調査に対しては、点数を次年度のデータにするようなことは考えていない。あくまで入学後の学習指導に生かす方向で考えている。

[望月委員長]

推薦入試の在り方については以上とする。これは中学高校の接続だけの問題ではなく、高校大学も同じ問題を抱えている。関係機関とよく話し合いをする必要がある。その他の入試に係る事項について目を通してほしい。

[松尾委員]

(1)の調査書について文言に問題はないと思う。ただ、平成24年度の中学校1年生から適用になることから、本年度中には固めて周知徹底を図る必要がある。あとからになると、受検生からも親からも中学校からも風当たりは強いだろう。今年度中に決定する必要がある。それから、評定換算点の在り方について、4ページの下の表を使うことになると思うが、2番目の調査書(9教科の2・3年生の評定)これが330点とあるが、これが1年生が加わって合計330点となるのか、3年生に重きを置いたものになるのか。中学校としては、3年間を見通し1年生の分もきちんと見てほしいという立場だと思うが、高校から見ると1年生はよかったがだんだん評定が下がった生徒より、2年3年と評価が高まっている生徒のほうが欲しいだろう。そのあたり、どちらの気持ちをくみ取るかも大事だと思う。十分な検討が必要だろう。

[高橋高校教育課長]

この提言を受け、今年度中には、入試要項案の概要を策定したい。今の6年生が中学校に入った時点から、頑張ろうという気持ちになってくれるよう、今年度中に発表したいと考えている。評定の換算についても、これからやはり事務局で、中学校、高校の先生の意見を聞きながら、年度内に策定したいと考えている。

[清水委員]

私の前任の菅原委員から定時制の入試について、県の定時制校長会の資料を提示された。その中に、今回、検討している成人卒のことが盛り込まれていたが、従来からの課題である面接の配点について、第2回目の時に、定時制からの提案があったようだが、特に検討されていないようなので、改めて定時制における入試の面接点について、教育委員会で検討させていただきたいと思う。基礎学力は大前提だが、定時制を受ける生徒は、不登校を経験し

た生徒が占める割合が年々高まっている。そうした生徒達は、学力の面で心配はあるが、高校で一生懸命頑張りたい、勉強したい、卒業資格を取りたいという意欲は高い。しかし、現行の入試制度では点数が重視され、なかなか合格ラインまで届かないこともある。こうした観点から、定時制の面接の配点についてご検討いただければと思う。

〔高橋高校教育課長〕

その件については、昨年度に前校長の菅原校長からも話をいただいている。定時制が多様な生徒を受け入れている実態を踏まえ、面接の時間を増やし、さらに面接点を重視する方向で改善する必要がある。定時制高校の先生などからご意見を頂きながら検討させていただきたい。

〔坂本委員〕

文言の確認をお願いしたい。(5)の不測の事態への対応について、箱の中と上の4行赤い字で書いてあるほうは、両方とも危機管理体制となっているが、黒い方は上の方が防災体制となっている。地震や津波等へのたいせいづくりにつきましては、上の方が態勢で、下の方が体制になっている。これはあえてこうなのか、統一したほうがよろしいのか、確認をお願いしたい。

〔高橋高校教育課長〕

統一した形でやりたい。

〔川崎委員〕

ことばの意味を説明願いたい。「特色ある学校づくりの推進化を図るため」とあるが、推進化を図るは？ どうかと思う。

〔望月委員長〕

推進を図るではないか。

〔高橋高校教育課長〕

そうしたい。

〔望月委員長〕

原則としてこの提言案を12月に提出する。今の川崎委員のご指摘のような文言の詰めは委員長に任していただきたい。後ほど委員の方々に修正したものをご連絡したい。

〔高橋委員〕

推薦入試の在り方の(2)の提言案は、もう少し強い調子で提言できないものか。やはり「学力調査の実施を検討する」ではなく、「学力調査を実施する必要がある」の方が良いのではないか。

〔高橋高校教育課長〕

委員の皆様いかがか。できればそのような文言としたい。

〔高橋委員〕

あともうひとつ、この提言は平成27年度以降の高校入試についてだが、宮城県の高校入試が現在混乱しているようだ。受検機会の複数化をねらい、前期入試、後期入試の形を取ったことによるものようだが、そういう意味で、この提言が世の中にどのような形で受け入れられる分らないが、少し強いアピールを出す必要があるのではないかと思ひ、

先ほど発言した。

[川崎委員]

今の話とも係わるが、先ほどの推薦入試の（１）の応募資格の学校裁量の拡大のところで、現状は、スポーツ・文化・芸術等での推薦枠が強いと思われるが、各学校で、知的な学力の部分についても推薦の基準等に入れられるような意味も含めてみると、この裁量の拡大を捉えていた。ここがもう少し分かりやすい形での提言だと、各高等学校は特色ある学校づくりがしやすいのではないかと思う。

[佐々木教育次長兼学校教育室長]

８ページの推薦入試の在り方の（１）の枠の中は、先ほどもご指摘いただいたように、応募資格についての文章が専門高校を対象とした改善だと誤解されるおそれが川崎委員のご指摘のとおりあるかと思う。全ての学校学科について学校裁量の拡大を図るという観点で見直す形にしたい。文言整理の検討をさせて頂きたいと思う。

[玉川委員]

２点お話したい。ひとつは推薦入試についてである。

多様な能力の生徒を様々な形で受け入れるという趣旨でやっている部分があると思うので、その多様な能力の評価の仕方について吟味が必要だと思う。学力調査の部分だけでない能力を評価しながらということでの推薦入試ではないかと、当然、基礎学力とか学力の部分は、高校教育に耐えうるということが必要な部分ではあるが、それも多様な能力の一部という捉え方の推薦入試ではないかと思う。

もう一点、意見である。改善と直接的な関わりはないが、特別支援教育に係わり、今の状況ではほぼ全入に近い形で様々な生徒が高校に進学している状況がある。その他の入試に係る事項の（４）にこれについて提言しているわけだが、中学校、高校の教育内容についての連携を、いろいろなところで図っていく必要があると考えている。制度の改善云々ではないが、別な場所で話す内容かもしれないが、実態として、特別支援が必要な生徒が高校に進学している状況があるので、受け入れとか、中学校と高校の連携を図る必要があるのではないかと思う。

[鳩岡委員]

８ページから１１ページについては、概ね明朝体の部分が現状と課題、そして箱の中がそれに対する回答だが、先程来話題になっている、８ページの２の（１）の、「また、専門高校の中からは、農業後継者や工業技術者等を育成するための推薦入試の在り方が求められて」というのは、現状と課題なのではないか。これを入れるから、ごちゃごちゃしてしまった感じがする。これは外した表現をしたほうが良いと思う。それから、「学校裁量の拡大を図る必要がある」については、学力に特化していいんだな、ととられかねない。しかし、大元は、推薦入試の在り方という根っこがある。それをおいて、学校裁量ということで学力に特化するというようなことになれば、おかしいことになってくると思う。

[望月委員長]

これらも含めて最終調整させていただきたい。熱心にご討議いただき、いろいろな意見を聞かせていただけたことは、この問題が様々な論点を含んでいるということであり、難しい問題だということも示していただいた。改めて、熱心にご討議いただきましたことに感謝いたします。

５ その他 [高橋高校教育課長]

望月委員長、ありがとうございます。「５ その他」について、こちらで用意しているものはありません。皆様から何かございますか。

[及川委員]

パブリックコメントの件である。課題によっては、重点的に落として意見をいただくような方法もあるのではないかなと考えた。こんなに長い時間、公開したにもかかわらず、まったく意見がなかったことは非常に残念である。

[高橋高校教育課長]

今後検討して、多くの意見をいただけるように努力して参りたい。

昨年6月から6回にわたり開催してきた入試改善検討委員会も、今回で終了となる。毎回、お忙しい中、本委員会のために時間を割いていただき感謝申し上げます。委員の皆様からいただいた貴重なご意見のおかげで、今回、提言書という形にまとめることができた。今後は、この提言を踏まえ、新しい入試制度の策定を急ぎたいと考えている。具体的には、12月12日に望月委員長から正式に答申を受けて、県教育委員会として入試案を作成・検討し、平成24年3月に新入試制度の概要を発表する予定となっている。以上で、県立高校入試改善検討委員会のすべてを終了します。これまで本当にありがとうございました。